算命学中庸

【初年】４回目

４回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖三つの礎〗その(3)陰陽論

(3) 陰陽論 おんようろん

通常は「陰(いん)」と「陽(よう)」というふうに分けて表現するときには、陰(いん)と陽(よう)といいますが、陰と陽に続いて、何か文字が付いたときは、陰を（おん）と読むのです。

陰陽論の場合は、陰陽のつぎに「論(ろん)」という文字が付いていますので（おんようろん）と読みます。

「自然界の万物は陰と陽から成立っている」このような考え方が陰陽論にはあります。

陰陽論 ⇒ 自然界の万物は陰と陽から成り立っている

どのような物質も「陰」と「陽」という、相対する性質の違う二つの組み合わせで成立ち、そこには必ず陰と陽の存在がある。そういう考え方です。

〔たとえば〕人間には男と女がいます。

男と女　これも陰と陽なのです。

一日にも、昼と夜があります。

昼と夜　これも陰と陽です。

昼があれば、夜があるという、相対する反対の性質のものが存在して､二つ異なる質の組み合わせで､一日という時間は成り立っているわけです。

電気にも、プラスとマイナスがあります。

プラスとマイナス

ご存知のように、プラスの電気とマイナスの電気の両方が揃わないと電流は流れないわけです。

片方だけでは電気にならないのです。

おなじく磁石にも、Ｎ極とＳ極があります。

Ｎ極とＳ極

どの磁石も、片方が北を指させば、片方は南をさすようにできています。

片方だけの磁石というのはないですよね。

これも陰と陽です。

一人の人間も、肉体と精神をそなえています。

肉体（にくたい）と精神（せいしん）

これも陰と陽になります。

天（てん）と地（ち）

天と地というふうに、自然界を大きく二つに分けることもあるわけです。

これも陰（いん）と陽（よう）です。

地球上は……

陸と海

地球は、海か陸かのどちらかです。

海と陸というように分けても陰と陽です。

光(ひかり)と影(かげ)

人生にも光と影ありますし、太陽の陽射(ひざ)しが出てきたら必ず影ができます。

あるいは、物事には……表があれば裏がある。

表(おもて)と裏(うら)

人間は誰でも表と裏をもっているとおもいます。

生と死

生があれば死がある。というように陰と陽です。

親と子　といっても、陰と陽です。

人間関係でも……**上司と部下**

上司と部下とに分けても、これも陰と陽です。

世の中の貧富(ひんぷ)の差

貧富

この陰と陽、世界の中には、貧しい国と豊かな国、このことはいつの時代でも必ずあるはずです。

強いものと弱いもの　この強弱も陽と陰になります。

大きいものと小さいもの　これも陽と陰になります。

万物はどんな姿でも、「陰」と「陽」からできている。
という考え方が「陰陽論」です。
まだ、列挙(れっきょ)していけばたくさんあると思いますが、どのようなものにも、必ず陰と陽があるという考え方です。

✏ 運勢もそうです。
陰(いん)の運勢(うんせい)の人と、陽(よう)の運勢(うんせい)の人がいます。
あるいは、陰の時期、陽の時期があるのです。
すべての物事を、陰と陽の二つに分けて判断していくのが陰陽論です。

陰陽論で重要なことは、物事を二つに分けたときに……
どちらを「陰(いん)」とするのか、どちらを「陽(よう)」とするのかです。
どちらが陰でも、どちらが陽でも、構わないともいえますが、実際に占いをするときには、統一した基準で陰陽を区別しなくてはいけないのです。

「陰と陽を統一した基準で決定する」 その基準は……

『主体性のあるほうが陽』　『主体性の無いほうが陰』

主体性のあるほうが陽で、主体性のないほうが陰です。

判断基準はこれだけです。

陽と陰を書くときは、陽を＋であらわして、 陰をーであらわします。その記号で書くことも多いです。

そこで、＋とーでいくつか考えてみましょう。

男と女

男と女といったときに、主体性があるほうが「陽」です。

このことを基準にしますと、どちらを「陽」にするべきだとおもいますか……?

判断基準は、主になっているほうが陽、主でないほうが陰です。――世の中では、男と女ではどちらのほうが、主になっていると考えるべきでしょう……？

算命学では、男が陽で、女が陰だと考えています。

㊚ と 女

＋　　－

人間の世界では、どちらかといえば男が主体である……

このことは ➡

〔たとえば〕一家の運勢を占うときに、夫と妻、二人の運勢を観たとき、夫の運勢がよい場合と、妻の運勢がよい場合とでは、どちらのほうが一家全体に及ぼす運勢的な影響が大きいのかといえば、夫の運勢がおよぼす影響のほうが大きい場合がほとんどです。

もちろん世の中には、妻が働いて、夫は家事をやっています。というご夫婦もいるでしょうけど、世の中全体で考えれば、一般的には夫のほうが主になります。
〔たとえば〕夫が出世すれば、一家全体の運が上がっていきます。夫がダメになれば、一家全体の運は下がってしまうのです。
それゆえに、運勢の鍵を握っているのも、世の中を動かすということにおいても、主になっているのは男のほうだと、基本的には考えています。

小泉総理のときに、83 人の小泉チルドレンが誕生して、女性議員が何人も当選しました。
今まで、女性の総理大臣は日本には一人もいません。
また、企業でも女性のトップは少ないです。

このことが良いとか、悪いとかを論じているのではなくて、どちらかといえば、現在(いま)の人間の世の中は、男のほうが主ではないか……と考えているわけです。

☞ ここで誤解してはいけないのは――陰陽論はどのようなものでも、陰と陽から成り立っているという考え方ですが、陰と陽の片方が欠けると、もう片方も存在できなくなってしまう組み合わせだということです。
人類が存続ということでいえば、女性がこの世の中から一人もいなくなってしまったら、人類は滅亡してしまうわけです。
おなじく、男性が一人も居なくなっても、人類は滅亡します。人類が存在するためには、男女が共に必要です。
ほかの動物でもそうです。
オスとメスの両方が存在しないと滅亡します。
そうしますと……陰と陽の価値はおなじということです。

陰と陽の価値は同等である

算命学は『男を陽』『女を陰』としていますけど、男は陽だから、男のほうが立派だという意味ではないのです。

〔主体的要素があるほう〕と〔従属する要素があるほう〕という考え方を基本にして、陰と陽を区別します。
陽には陽の役目があり、陰には陰の役目があります。
どちらの役目のほうが、価値が上だとか、価値が下だとか、そういうことではないのです。
どのような「陰」と「陽」の姿であっても同等です。
そうしますと、昼と夜では……といった場合、どちらを陽とするべきだとおもいますか？

㊐と 夜

＋　　－　　人間の生活にとっては、昼が主たる時間帯

やっぱり、夜は休む時間帯です。
世の中には、夜働いて、昼眠るという人もいますけど、一般論としては、昼間の町中のほうが活気に満ちています。車もたくさん走っているし、人通りも多いわけです。
夜になると車も減るし、人通りも減るし、活気も無くなります。
ということは、一般論として、やはり昼が主たる時間帯で、夜は主ではない時間帯といえるはずです。

つぎに――肉体と精神といった場合には、どちらを陽とすべきだとおもいますか？

人間はどちらのほうが主体的でしょう。

肉体 と (精神)

＋

算命学は「精神は陽」で「肉体は陰」だと考えています。

陰と陽を区別で、どちらが主体的であるのかといえば、人間は精神が命令を下(くだ)します。肉体はそれに従います。〔たとえば〕心(こころ)で手を挙げようとおもうから、手を挙げるはずです。

算命学を勉強してみようと、精神のほうでおもったから勉強しているかと思いますが――どうでしょう。

精神がなにも思っていないのに、パソコンのキーを叩いて、文章なりを作成する人はいないでしょう。

精神と肉体との連携(れんけい)は、精神が判断して命令を下して、肉体はそれに従うという関係になっているはずです。

それゆえに、算命学では、占うときも、精神を「陽」として占います。肉体は「陰」として占っていきます。

このことはとても大切です。

☞ 占いをするときに、どちらが陽で、どちらが陰なのか、それを決めなくてはならないことが出てきます。
そのときに、陰と陽を、逆に決めてしまうと、占いのこたえも、反対のこたえになってしまうわけです。

常にどんな場合でも「主体的なほうが陽である」という基準で陰陽を分ける。そのよう思ってください。
「主体性のあるほうが陽」という、この基準だけは覚えて頂きたいのです。
このことはたびたび必要になってきます。

☞ さきほど、男と女ということで触れましたけど――通常は〔男が＋〕で〔女はー〕ですから、夫と妻という二人の占いをするときに〔夫を＋〕として〔妻をー〕として観てゆきます。
〔たとえば〕『子育て』ということについて、陰陽に分けようとする場合ですが、そのときに〔子育てを妻が主(おも)にやっていて、夫はほとんど子育てには参加していない〕という場合もあります。
実際にそういう状況であれば、子育てについての占いを

するときは、妻が主体的な立場にいるわけですから、
「妻を陽」として占うことになります。
そのように考えていただきたいのです。
「主体的な立場にいるほうが陽である」この基準を覚えてください。

✏ もうひとつ、陰陽論において知っておいて頂きたい大切な法則があります。
それは「陰陽が交互に並ぶものは、連続性がでる」ということです。

陰陽が交互(こうご)に並ぶものは、連続性(れんぞくせい)がでる

陰陽が交互に並ぶものは、連続して続(つづ)いて行きます。
陰陽が交互に並ぶというのは、つぎのような姿です。

陽　陰　陽　陰　陽 …… ……

＋　－　＋　－　＋ …… ……

つまり〔陽が来たら、つぎに陰が来る〕
〔陰が来たら、つぎに陽が来る〕
そして〔陰が来たら、つぎにまた陽が来る〕そしてまた〔陰が来る〕というようにです。

〔**陽**・陰・陽・陰・陽・陰〕このように、交互に陽と陰が並んで行くわけです。
このことは〔**陰**・陽・陰・陽〕でもおなじです。
陰と陽はどちらから始まっても構わないのです。
とにかく――〔陰が来たら、つぎは陽〕
〔陽が来たら、つぎは陰〕というように、陰・陽・陰・陽と並んでいるものは長続きする。と考えておけばよいのです。

〔たとえば〕人間が生きていられるのも、呼吸をしているからです。「息を吸って吐いて」「吐いたら吸って」と、息を吸って吐く、吸って吐くと、呼吸を繰り返しているので、生きていられるわけです。
もし、息を吸ったのに、つぎに吐かなかったら、どうでしょうか、やってくださるとわかります。
逆に――息を吐きました、つぎに空気を吸わなかったらどうでしょう。
空気を吸ったら吐かないといけないし、吐いたら吸わないといけないのです。吸う・吐く、吸う・吐く、を続けるので、生きていられるわけです。

☞ 先ほどの〔昼と夜〕の場合でも、昼働いて夜眠る。また、昼働いて夜眠る、という行動を繰り返しながら、人間は生きて、人生を渡って行きます。

これが仮に――昼働いたのに、夜もまた働きました、となると健康を維持できません。
昼は主体的に行動して、夜は行動しない。そして、昼になったら主体性をだして、夜は主体性を出さない。というように陰陽を繰り返しています。
これを繰り返すことで、健康を維持できるはずです。

昼に働いているのか、働いていないのか……どっちだか判らないような生活とか、夜眠っているのか、眠っていないのか判らないとか、そのような不規則な生活が多い状態を、数多く繰り返せば、繰り返すほど寿命は縮(ちぢ)むでしょう。
昼働いて、夜も働いて、そしてまた昼働いて、夜も働いてとなれば過労死です。
昼寝ていて、夜寝ていて、また昼も寝て、また夜も寝てという無気力であれば、これも問題です。

人間が生きてゆくためには、きちんと活動して、きちんと休んでと、規則正しく活動して、規則正しく休む、という状態を繰り返さないと、健康を維持することは難しくなりますし、長生きはできないはずです。

♪ 会話もそうだとおもいます。
片方がしゃべったら、片方は聞き手にまわらないといけないわけです。そして、今度は、もう片方がしゃべり出したら、もう片方が聞き手になって、二人の間で交互にしゃべって聞いて、しゃべって聞いてと、繰り返されるほど話も弾(はず)むでしょう。

ところが、これが片方だけが一方的にしゃべり続けて、片方は一方的に聞き手という状態を続けていたらどうですか……多分､苦痛になるし､話しも弾まないでしょう。いつもそのような会話の状態であれば、人間関係も長続きはしないとおもえます。
つまり、どのようなものでも、どのような姿であっても“交互に並んでいるほうが長く続く”という法則があるのです。

算命学は、この法則を、結婚にも適合させますし、財産にもあてはめます。
寿命にも、あるいは、家系の流れにもあてはめます。
さまざまな状況に、この法則をうまく当(あ)て嵌(は)めながら、占うときには、つかっていくようになります。

〔たとえば〕結婚生活も、夫婦仲のよい時期と、夫婦仲の悪い時期が、少し繰り返されたほうが長持します。
仲がよくて……でも喧嘩して、また仲なおりして、また喧嘩してというほうが長く続くと考えています。
結婚以来、一度も喧嘩したことはありません――ずっとラブラブです。という結婚はおもいのほか、長くは続かないでしょう。 仮面夫婦かもしれません。
もちろん、結婚した後(のち)に、今年も喧嘩しました、その翌年も喧嘩しました、再来年も喧嘩していました。というような状況であれば続きません。

✏ 仕事もそうです。
仕事も、良い時期、悪い時期、あるはずです。
よい時期が来たらつぎに悪い時期が来て、またよい時期

が来て、また悪い時期が来て、という状況が繰り返されるほうが、長く続くと考えています。

〔たとえば〕爆発的に成長した会社があるとします。
その会社が、また成長して、また成長して、というような会社だと、結局いつかは倒産することになります。
そのような会社は長くは続かないものなのです。
成長したら、つぎは休みの時期が必要ということです。

人間は昼働いたら、夜は休まなくてはいけないのです。
休んでエネルギーを貯えているからこそ、また働けるわけです。

このことは、運勢もおなじです。
家系の流れにしてもおなじです。
〔たとえば〕一代目が陽の時代だとすれば、二代目の人は陰の時代にならないといけないわけです。
三代目がまた陽の代で、四代目がまた陰の代でというように、陽の代と、陰の代が、交互(こうご)に巡(めぐ)る家系ほど、長く続くものです。

〔たとえば〕天皇家でいいますと：

現在(いま)の天皇家は、明治維新・明治天皇の時代から新しい天皇家の時代が始まりましたから、明治天皇を一代目として考えます。

１代目－明治天皇　(陽)
２代目－大正天皇　(陰)
３代目－昭和天皇　(陽)
４代目－平成天皇　(陰)
５代目－令和天皇　(陽)

このように並べて、それぞれの代を、陽の代と、陰の代にあてはめて観るわけです。基準は、先ほどから申しあげていますように、主体的であるほうが陽の代です。
主体性のない代が陰の代です。基準はこれだけです。

主体性の発揮の仕方にはさまざまな姿があります。

そうしますと、明治天皇を「陽」と「陰」で分けるとすれば「陽」です。

明治は 45 年も続いて長かったですし、徳川家の統治(とうち)から実権をもつ天皇になりました。

明治天皇の父親・孝明天皇は〔35 歳〕で崩御しました。
天皇家の歴史のなかで、明治天皇は御維新の天皇として主体的な体制を発現（はつげん）できた天皇だと考えられます。
明治天皇は陽の代です。　参考・発現〔あらわし出ること〕

大正天皇はお身体も弱く、昭和天皇が摂政（せっしょう）をなされていたことからして、主体的な立場をあまり出せなかったと考えられます。大正天皇は陰の代といえます。
参考・摂政〔天皇が病弱などのとき、代わって政務を行うこと〕

昭和天皇はどうでしょう……「陽」です。
昭和の時代は 63 年間続きました。長さだけで考えても、歴代の天皇のなかで最長の在位記録です。
太平洋戦争を体験され、軍神とも称されていたわけですから、主体的に動かれた天皇だといえるでしょう。

平成天皇はどちらでしょう……「陰」です。
明治天皇とか昭和天皇と比べると、あまり主体的な行動はなされておりません。
昭和天皇は 1989 年 1 月 7 日〔87 歳〕で崩御されました。

昭和天皇が〔69 歳〕のときから、平成天皇の時代が来ていたのですけど（六律帰結で学びます)、昭和天皇は退位されていません。つまり権力を握っていました。
また、平成天皇は昭和天皇の子供中殺で天皇になった経緯もあります。それらの事象も内在されています。
その意味では陰の代です。

そうしますと、天皇家はこれまで、陽・陰・陽・陰と、交互に来ています。
陰陽が交互に続く家系ほど長く存続しますので、この後も、天皇家は長く続くといえるわけです。
陰陽の連続性はこのように考えます。

この陰陽交互の流れは、どの家系にも当て嵌まります。
〔たとえば〕一代目の人が見事で、家系をとても栄えさせましたとします。それに続く二代目が、さらに家系を栄えさせたほうが良さそうに思えるでしょうが――そうではないのです。
✤ 一代目の人が家系をすごく繁栄させました。そして、つぎの二代目も、また家系を繁栄させました。

そしてまた、三代目も家系を栄えさせた。
もし――このような家系があったとすれば、その家系の四代目は潰れると占ってよいのです。

家系も、立派・立派・立派、と続いてはダメなのです。
立派・立派じゃない・立派・立派じゃない、このように陰陽のリズムで存続しないと、家系は続かないのです。
☞ もちろん、一代目も、二代目も立派でなくて、三代目も立派でないという場合も潰れますよ。

外見（そとみ）には――立派な人が代々続くと、家系もそれに比例して栄えるような気がしますが、そうではないのです。
もしも、立派・立派・立派、と続いたとすれば、それは昼も働いて、夜も働いて、昼も働いて、いう連鎖の姿とおなじようなものです。いつかは倒れます。

ただし……寿命という意味では、現代医学はとても進歩しています。本来なら健康状態を維持できない状態なのに、なんとか維持できる時代です。
そこにも、さまざまな事象があらわれるわけです。

✏ 自然界の樹木でも、樹齢何百年という大木に成長した樹木、あるいは縄文杉とか、何千年も生きて来た大木ほど、春に成長して、秋には成長が止まります。
そして、また春になると成長して、秋になると成長が止まります。その姿を毎年、毎年繰り返えすことで、１年に１本ずつ年輪が加わっていきます。
きちんと陰陽を重ねた樹木は春と夏に成長します。
ところが……秋と冬も続けて成長して、また春にも成長したとすれば、疲れ切ってしまって続かなくなります。
これは人間の運勢もおなじです。

天皇家は平成天皇まで「陽・陰・陽・陰」の順番で来ていますので、つぎの天皇は「陽」の代になれそうですね。
という占いができるわけです。

皆さま方も、名門の家系をつくろうとおもったら、自分の親が陽の代だったのか、陰の代だったのかを見て、親が陽の代はあったのなら、自分は陰の代をやればよいわけです。
そして、つぎは子供に陽の代をやってもらうことです。
この姿を何代か続ければ、必ず、その家系は名門の家系にでき

あがっていきます。親が陰の代なら、自分が主体的な生き方をして「陽」の代をやればよいのです。

自分が陽の時代を築いたのであれば、子供には陰の代をやってもらうことになります。そして、孫の代には、また頑張ってもらって、陽の代をやってもらってと、このようにやっていくうちに、樹木でいえば見事な大木に成長して、ちょっとやそっとでは倒れない、しっかりした家系が出来あがっていきます。

陰陽論はきわめて奥の深い理論です。

これからも陰陽論を用いた技法は出てきます。

そのたびごとに、理解を深めていただきたいとおもいます。

受講生の皆様は、これまでの授業で算命学の基本的な考え方を勉強してきました。授業は前へ進みますけど、ここでの考え方は必要になってきます。

【初年】４回目〖三つの礎〗その(3)陰陽論　終わります

つぎの授業 ⇒【初年】５回目〖生剋比論(しょうこくひろん)〗